

隠れてオナニー配信をしてたら幼馴染にバレて、
同接10万人の前で処女を奪われ公開溺愛されました

サンプル（一部抜粋）

「皆さん、こんにちは♡つむだよ♡！」

今日はねー…新しい下着を買ったから、それをぐちょぐちょに濡らしちゃおうって企画！
あ、おじちゃんさん、いらっしやい♡いつもありがとね♡♡

…そうそう、この前のスパチャで、新しい下着買ってって言ってたでしょー？
だから、今日はね…特別にオナニー配信…♡だよ！」

無駄に明るい部屋の一角。映り込む背景は女の子らしく、可愛く…整えられている。
映らない場所は無機質で何もないのに。

画面に映っているのは私の口から下のみ。顔は出していない。身バレは怖いし…。

「あ、もお！」

オナニーはいつもしてるくせに…って…それ秘密だから！」

いつもの自分の声より、ワントーン上げた猫なで声。自分でも気持ち悪いと思うし、くだらな
いと思う…。

でも私には…これしかできない。外に出る事は…できないんだから。

少し大きめのシャツを身にまとい、じらしながらボタンを外す。

配信のルールは…乳首や陰部が直接画面に映らないようにだけ、気をつければいい。

映ってしまったら警告の通知が来て、2分以内に隠さないとBANされてしまう。

それ以外は特に、決まり事はない。ただより多くのスパチャをもらうために、エッチで淫乱で敏感な女の子を演じるだけ。

「じゃーん、見てー！このブラ、ちょっと透けてるでしょ？」

これね、あえて生地が薄いやつを選んだの。

なんでって…いつも見てくれてるTMさんなら分かるくせに♡

だってね、薄い方が乳首、弄りやすいんだもん…っ」

えっちな言葉、淫乱なフリ。画面の向こうで鼻息を荒くしている人はきつと…私が処女で恋愛経験もないなんて…知らない。

「乳首、いじっていい？」

自分の指でコリコリと乳首を弄る…。

「は…あ…ああ…っ」

何も感じなくせに、わざとらしく声をもらしていく。

「あ…乳首気持ちいい…っ、コリコリしてる…あああっ♡

あ…。MKさん、スパチャありがとっ♡今からもっとえっちな事するから、じーっと見ててね…♡」

『つむちゃんの唇えろすぎ！おちんちん突っ込みてー！』

『身体ビクビクして可愛すぎ！』

そんなコメントで埋め尽くされる。同接が1万人ほど。

私の目がいかに死んでるかも…知らずに騒がれている。

スパチャの通知音とコメントだけを読みながら、適当に足を開いて、イクフリをする。

そんなくだらなくて、性欲にまみれただけの小さな世界。

それが私の世界だった。

まさか…幼馴染に配信バレするなんて、ましてやこの男達の前で処女を奪われるなんて、想像することもなく…。

（中略）

子供の頃から内気な人間ではあったけど、外に出られない程ではなかった。

普通に学校にも行ってたし、友達も親友も…いた。

でも高校生の時、親友の好きな人に告白された事で一気に私の人生は変わった。

昼休み、教室で：親友も同級生も居る中で

「紬ちゃんのことを好きなんだ。付き合ってほしい。」

って告白された時の、あのなんとも言葉に出来ない空気感をまだ覚えてる。

もちろんすぐに断ったけれど：

「なんで私じゃなくてあんたなの：」

って親友に言われたんだっけ。

そこからは：壮絶だったな。

噂がねじ曲がって、私が親友の好きな人を誘惑したとか、人のモノに手を出すのが好きなクズ女とか……

色んな嫌な噂が広まって、私の周りからは人がいなくなった。

友達が一人、また一人と私の元から離れていくあの孤立感……。興味本位で私に近づいてくる人

はいたけど、私の悪い所を面白おかしく同級生に伝えられ：結局は孤立したままだった。

学校に行くのが怖くなって、人の目が怖くなったのはその頃から：かな。

徐々に学校に行けなくなつて、外に出るだけで、人がいるだけで：怖いと思うようになっていった。人が笑っているのを見るだけで、うまく息を吸えなくて呼吸が苦しくなる。

もしかしたら私の事を笑っているのかもしれない……そう思うだけで、その場から動けなくなる。徐々に自分の部屋に閉じこもるようになって、一日中何もせずに布団をかぶって光を避ける……。私はただ……死ねない個体だった。

ただそんな私が今生きている理由は……間違いなく、幼馴染のお兄ちゃんのおかげ。お兄ちゃんとは私より3歳年上の、カッコよくて優しい人……。

親同士が仲良しな事もあって、時々実家に来てくれて遊んだり笑ったりしていた。それは私が引きこもりになっても、何も変わらなくて……

「紬。一緒にゲームでもする？」

なんて優しく声をかけてくれてたんだっけ。

学校で何があったのかとかは一切聞いてこなくて、ただ傍にいて私の存在を認めてくれる人だった。

(中略)

『下着濡らしてんじゃん！』

『ちんちんほしい？』

『つむちゃんのおまんこ、べろべろ舐めまわしたい……』

並ぶコメント……。

「みんなに舐められてるの、想像して…オナニーするね♡」

いつもいつも…私は自分の決めたセリフしか口にしない。だから同じ文言ばかりを口にしているのに、誰もその事には気付いていない。

下着の中にゆっくりと手を入れ、潤滑液を指で拭って、くちゅくちゅとわざとらしく音を出す。

「は…あっ、あっ…」

指の動きに合わせて声を出す…。

『つむちゃん、くちゅくちゅ鳴ってるよ。』

『濡れすぎ！』

『えっろ…』

そろそろイっておいた方がいいよね…。その後は軽く中に指を入れて、ぐちゅぐちゅ鳴らしていったフリをして終わり…かな。

この後の予定を頭に浮かべ、身体を痙攣させる準備をする。

ただどその瞬間、バンッと激しい音とともに、配信部屋のドアが勢いよく開かれた。

「っ！」

ビクッとして慌ててドアの方へと視線を向ける。

そこに立っていたのはお兄ちゃん…その顔は見たことも無いほどに怒っていた。

眉間に刻み込まれた深い皺。怪訝そうな瞳。硬く噛みしめられた口…。

「…なにしてんの。」

いつもよりも低く、冷たい声…。

状況を理解できなくて、動けない。お兄ちゃんは今、仕事のはず…だよな？

今まで一度もこの時間にここに来た事はないよね…？

なんで…？

手は下着の中に突っ込んだまま、カメラに向かって足を開いたまま…私は動けなかった。

(中略)

「ぐ…あ、あ…ん…お兄ちゃ…んっ…」

「んー？」

「そこ…なんか嫌…っ」

「へえ。そっか。」

お兄ちゃんは私の言葉をまともに受け取らず、そのまま浅い場所をぐちゅぐちゅと音を立てて押し上げ始めた。

『音えぐ…』

『これ、でも全部ローションなんだろう？』

『つむちゃんの蜜かもしれないじゃん！』

音が激しくなるにつれて、またスパチャの音が響く…。

「ひ…ぐ…あおつ、そこ、ぐちゅぐちゅ…だめつ、あおあおつ、やだ、お兄ちゃんっ…なんか来そう…なのっ…!」

「…だろうね。」

「いいよ。我慢しなくて。」

おにいちちゃんの指が更に激しく、ぐちゅぐちゅと私の中を抉る。

「や…来ちゃうって…ば…あおあおっ!!」

身体が硬直し、じゅわ…とおもらしをしたかのように…下着が激しく色を変えてぐしゅぐしゅに湿っていく。

「ひ…なに…や…っ」

身体を痙攣させながら困惑する私…。ポコンポコンと激しく鳴るスパチャの音。

『潮吹ききた!』

『やべー…下着がまじで邪魔なんだけどw』

『10万人の前で潮吹き乙w』

「は…あ…あ…見ないで…って言ってるのに…っ」

「…なんで？」

いつも見てって言ってたんじゃないの？皆にいくところ、見てほしかったんだろ？だから配信

してたんだよな？俺に嘘をついてまで、やりたかったことなんだろう？」

「ちが…っ…」

「お前のその下品な喘ぎ声も、イキ狂う情けない音も、全部カスどもが生で聞いてるんだよ。嬉しいか？それがお前の望みだったのか？」

…違う。こんな風に汚されたくてやってたわけじゃない。ただ、自立したくて、お兄ちゃんに迷惑をかけたくなくて…。

否定したいのに、潮を吹いたばかりの敏感な場所を、ぐちゅぐちゅと激しく抉られる。

「俺はお前を大切にしていたのに…。

悲しいよ。」

「ぐ…う…あああつ、そこ、やだあつ…出ちゃ…う…っ…」

「誰に愛されるのが一番気持ちいいか。

ちゃんと見せつけないとね。

これが最後の配信なんだから。」

（「みんなに見せてあげようか。お前が誰のものか。」

幼馴染のお兄ちゃんの公開溺愛の全容は、製品版にて）